

負けから学ぶこと

この秋、32年振りに日本で開催されているアジア大会では、連日、日本人選手の活躍が報道されています。中でも、1966年のバンコク大会以来、実に60年ぶりとなる男子卓球団体の金メダルは、長年に渡ってアジア、そして世界の頂点に君臨してきた中国を撃破したことで、日本の勝利をより一層、際立たせているようです。

スポーツには、不安が付き物です。試合前や大事な場面になるとプレッシャーに押しつぶされそうになることがあります。“負ける怖さ”は、プレーに集中できないばかりか、次の一歩さえも踏み出せなくなることがあります。さらには、勝てない、辛い、思い通りにならないなどの焦る気持ちが前向きな志向を失わせ、努力してきた時間的経過さえも無駄と感じてしまうほどです。

かの有名なアップル共同設立者スティーブ・ジョブズ氏は、「結果が重要ではない。旅の途中でどれだけ楽しいことをやり遂げているかが大事」との名言を残していますが、彼は、名声を手に入れるまでに一度アップルから追放されている経験があり、失敗や敗北を成功へのプロセスと考えることが大切だと説いたのです。このことから、日本の卓球が絶対的王者中国に勝てたことは、挫折や失敗から学ぶことの積み重ねがもたらした価値ある勝利だったのかも知れません。

令和8年9月、今年も大成祭が盛大に開催され、数多くの模擬店や催し物が校内、敷地内に所狭しと並びました。私は、毎年、演劇部の舞台を楽しみにしており、パンフレットで開演時間を確かめ、一目散に会場へ向かいました。

いよいよ幕が上がると、演じる生徒と観客との距離が近いこともあって、息遣いや額の汗など五感で感じる全ての生々しさが台本に書かれていない演出となり、瞬く間に観客の心を見事に捉えていきます。演目「今日の敗者達」は、努力してもうまくいかないことや、思うようにならないことに敗北感を感じる女子高校生の気持ちを表現した学園ドラマでしたが、生徒の迫真の演技で、私は今、目の前に起きている出来事がリアリティーあるものに感じ、いつのまにか登場人物の心情を汲み取っていました。ラストシーンでは、主人公の青葉志保が「私ね、大学落ちた。」と仲間に伝えると、同級生が「負けから学ぶこともあるんじゃないか。」と返し、「菊と響生と過ごしたこの時間がなかったら絶対に辿り着けない結論だよ。」と締めくくりました。会場の誰もが現実を忘れるほどの没入感に包まれ幕が下りました。

私は、年齢的にも過去を振り返ることが多くあります。選択や判断を迫られたあの時、もっと違う方法があったのではないだろうか、こうしておけばよかったなど、勝ち負けでの判断ではないにせよ、結果への評価がとても気になっていました。しかし、生徒の渾身の演技への感情移入は、うまくいった経験よりも、うまくいかなかった経験が自分らしさを形づくってきたこと、多くの先生方と過ごした時間がなかったら今の自分に辿り着けていなかったことを気が付かせてくれました。

上演後は、プレッシャーから解放された安堵感と演じ切った満足感いっぱいの生徒の笑顔が学びの匂いとなり、いつまでも鳴りやまない拍手で会場を感動の渦に包み込んでいました。



負けから学ぶこと、今日の敗者達は、これからの人生において、敗北や挫折に気づきを見出せたなら、それはもう勝ち負けではないと確信したことでしょう。そもそも勝ちの喜びは一瞬ですが、負けの学びは一生を支えてくれるはずです。演劇部の皆さん、とても素晴らしい舞台でした。感動をありがとう！

令和8年9月